



教皇様の敵

Libreria Editrice Vaticana,
Città del Vaticanoの転載許可済
©1989
発行所
財団法人 精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6
☎(0797)31-3452

信者の「はい、ここに居ります」

「はい、ここに居ります。」

1 この言葉はサムエルの書上の言葉ですが、今日の典礼の間中、実際にこの言葉「ここに居ります」が聞こえてきます。

若いサムエルが答えています。「サムエル、サムエル」と呼ぶ声に眠りから呼び起されたのです。彼は契約の櫃の安置された主の聖所で眠っていました。祭司エリに呼ばれたと思っていたのです。しかしエリはサムエルを呼んではいません。

サムエルを呼んだのは主でした。主は彼を三度呼ばれました。その度に若者は、人に呼ばれたと思いい、「はい、ここに居ります」と答えました。四度目になってやっと、呼んでいるのが主だと気づきました。人に答えていると思込んでいたサムエルは、その度に神に「ここに居ります」と答えていたのです。四

度目、その時にはサムエルも主のお呼びだと悟り、「主よ、お話しください。しもべは聞いて居ります」(サムエル上3・10)と言いました。

「ここに居ります」の意味

2 今日、今日の典礼は、私たちがいつも「ここに居ります」と神に呼びかけなければならないことと、主の呼びかけにいつでも応える用意ができていなければならないことを、非常に深遠な方法で教えています。

イエズス・キリストが、まず第一にお教えになります。(…)詩篇作者が預言的に御自身について語ったことを、まさしくあの夜、御自分の現存をもって明らかにされたのです。「あなたはいけにえと供え物を喜ばず、燔祭と罪祭を求められなかった。そこで、私は、『私はここに居ります』

と言った。あなたは私の耳たぶに穴を掘られた、巻物の本には私のことが、あなたのみ旨を行うようにと書かれている。神よ、私はそう望み、あなたの法は私の心のなかにある。」(詩篇39(40)・7-9)

「お呼びですか——私はここに居ります」という答えは、そこに居ることを表し、そしていつでも用意ができて居ることをも表しています。「ここに居ります」は、受肉したみことばという点から見れば、御旨を行うためにここにいますという意味なのです。

夜中、主の聖所で何度もハッと目覚め、「お呼びですか」と声をあげた青年サムエルは、彼の長上の望み、つまり神の御旨を行いたかったのです。

サムエルは主の聖所に住み、受肉したみことば、御父の御旨を行うために来られる御子を待ち望んでいました。

3 洗礼者ヨハネの弟子たちは、ヨルダン川でのイエズスの洗礼の後、同じ展望に導かれました。この出来事をヨハネの福音書が告げています。

洗礼者ヨハネはイエズスを指して「神の小羊を見よ」(ヨハネ1・36)と言いました。この言葉は御父の御旨を行うために来られ、「死ぬまで、十字架に死ぬまで従われた」(フィリピ2・8)御方のことを示すものです。

洗礼者ヨハネの弟子たちはイエズスについて行き、どこに住んでいるのかと尋ねます。その一人、アンドレアは兄弟シモンに、「メシア」に会った(ヨハネ1・41)と告げ、イエズスのところへ連れて行きました。(メシア)とは、神が油を注がれた者のことです。詩篇によれば、その方は御父に「私はここに居ります」と答えるのです。

アンドレアとシモンは「ここに居ります」と答えられた方に近づきます。その方は私たちのために御父にむかい「ここに居ります」と言われた方です。アンドレアとシモンはこの方と共に留まる覚悟で彼について行きます。イエズスはシモンに「あなたはケファ(岩の意味)と呼ばれるだろう」と言われました。(ヨハネ1・42)

4 今日、今日の典礼は、神の御前に生きることを私たちに教えています。神の御前に生きている人なら誰でも「はい、ここに居ります」と、いつでもすぐに主に答えられるのです。

これこそ大切な点です。創世の書を思い起す値打ちがあります。人祖が罪を犯した後、創造主である御父に対する最初の不従順の後、神が「どこにいるのか」と仰せられた時、アダムは「隠れました」と答えました。(創世3・8、10参照)

アダムは神を避けました。常に在す御方の前で自分の存在を消そうとしたのです。神の知恵をさきごろとしたのですが、神の知恵はあらゆるもの、人間の心の奥底までもお見通しです。

「私は居ります——お呼びですか」とは、「私をさぐり、私を知られる」(詩篇138(139)・1)主よ——神よ、私は御前に留っていますという意味です。「ここに居ります」と言うことは、「私」という自分だけを表しているようにみえますが、神の御言葉にたると、さらに重要でもっと豊かな意味をもっています。「私は居ります」「お呼びですか」と言うことは、ある人の前に、つまり他の人々の前に、しかし神の御前にいることを表しています。

今日の典礼は、神の御前に留りなさい、私たち一人ひとりの存在の奥に銘記されている契約を破ってはならないと教えています。神の御前に率直であること、真理の内に生きること、何よりもまず正直な良心の真理に生きること。最後に、呼びかけにすぐ応える用意のあること、サムエルのように、アンドレアとシモン・ペトロのように。

5 キリスト信者が言う「はい、ここに居ります」は、イエズス・キリストの言葉「私はここに居ります」の中に常に含まれています。イエズスはこの世に来られることによって詩篇の預言「あなたの御旨を行うようにと。神よ、私はそう望んだ」(詩篇39(40)・9参照、ヘブライ10・7)を全うなさいました。

「はい、ここに居ります。」

人間として、キリスト信者として神の御前で「ここにおります」ということは、イエズス・キリストの救いと贖いの「私はここにいます」と一つになっていきます。キリストの「ここにいます」に満たされているのです。キリストの「ここにいます」が(私)全体に浸み込んでおり、(私)全体が覆われているのです。

パウロはこのことについて次のように尋ねています。「あなたたちの体はキリストの肢体であることを知

「聖霊よ、来たまえ。」皆さん、聖霊降臨の日は教会全体が声を合わせ、信頼を込めて執拗に、「主に信頼する信者らに、七つの聖なる賜を下したまえ」と祈ります。(聖霊降臨の続唱)

今日お話ししたいのは、聖霊の賜の一つ、剛毅の徳についてです。現代は肉体的な力を称讃する人が大勢います。極端な暴力さえ認められることも時にはあります。実際、人間は日々みずから弱さを、特に精神的道徳的な面で経験し、情念の衝動と外的圧力に屈服するところがあるのです。

剛毅の賜を 願い求めよう

これら無数の衝動や圧力に抵抗するためには、剛毅の徳を持たねばなりません。剛毅は四つの枢要徳の一つで、道徳(倫理)生活全体の基礎となります。この徳のお蔭で妥協に屈することなく、義務を遂行することができるのです。

経済・社会・文化的な関係にお

らないのか。あなたたちの体はその内にある神から受けた聖霊の聖所であって、自分のものではないと知らないのか。まことにあなたたちは高値で買われたものである。だから、その体をもって神に光栄を帰せよ。(コリント①6・15、19、20)

使徒のこの言葉をじっくり考え、黙想しましょう。一度ならず何度も。キリスト信者が「ここにおります」と言うこと、神の御前に「お呼びですか」私は「ここにおります」と言う

ことの中に、非常に多くの宝が隠されているのがわかります。イエズス・キリストの御働きのおかげで、御父と御子と聖霊なる神が得もいわれぬ方法で私たちの内に、(私)の内に、靈魂の内に、身体の内在する事実からこの宝は来るのです。言葉の持つ雄弁さから絶え間なく神に応えること、「ここにおります」と神の御前に生きて御旨を果す覚悟のあることが言えるようになるのです。(八五・一・二〇)

「肉体の弱さを」感じる時(マテオ26・41、マルコ14・38参照)、あるいは肉体的精神的な弱さをもつ人間の本性を生々しく経験する時、善の道を堅実に確実に歩むため、剛毅の賜を聖霊にお願いしなければなりません。そうすれば聖パウロと共に、「私はキリストのために、弱さ、侮辱、窮乏、苦難、迫害に会うことを喜びとしている」(コリント②12・10)と言うことができましょう。

今日ほど、剛毅の徳が聖霊の賜の支えを必要とするときはないと思われれます。剛毅の賜とは超自然的な刺戟や鼓舞のことで、殉教のように例外的な場合だけでなく、日常の困難においても、靈魂に力を与えてくれます。自らの信条に一致した生き方をし、侮辱や不正な攻撃を忍耐強く忍び、理解されず敵意を示されても真理と高潔さの道を勇気を出して忍耐強く歩むため、大きな力となるのです。

ゲッセマニのイエズスのように、

聖体を あがめる



私たちはキリストのもとに留ります。最後の晩餐の時、使徒たちはこの言葉が成就するのを体験したのです。

「生かすのは霊で、肉は何の役に立たぬ。(ヨハネ6・63)

この言葉はヨハネ福音書の第六章にあります。聖体の制定について予告するのがこの第六章です。だから教会がキリストの御体と御血の祭儀を祝う時こそ、特に読む価値があるわけです。

「生かすのは霊で……私の言ったことは霊であり命である。(ヨハネ6・63)

この言葉はどういう意味でしょうか?

カファルナウムの近くでパンを増やした奇跡の後、イエズスは群衆にお話しになっています。

「命のパンは私である。あなたたちの先祖は荒野でマンナを食べたが死んだ。(…) 私は天から下った生きるパンである。」

このパンを食べる者は永遠に生きる。私の与えるパンは、世の命のためにはわたされる私の肉である。(…) 私の肉を食べ私の血を飲む者は、永遠の命を有する。(ヨハネ6・48、54)

キリストはカファルナウムの近くでこうお話しになりました。けれども、多くの人々には受け入れられない「むずかしい話」に思えました。それにもかかわらず、使徒

聖霊——生命を与える霊——は

すでに最初の予告の時に使徒たちがキリストの御言葉を「永遠の生命のみことば」として受け入れたことを保証しました。彼らが初めてパンとぶどう酒の形色の下に、キリストの御体と御血の秘跡に与ったその時、聖霊は使徒たちの信仰と理性を照らし、その心を生き返らせたのです。主の昇天とペンテコステの後、使徒たちの教えること……パンを裂くこと……に専念し(使徒行録2・42)ていた時にもまた、聖霊は彼らの最初の共同体を照らし元気づけました。私たちが聖なる犠牲に加わる時、聖霊は——その後何世紀も経ちましたが——私たちの世代を照らし、元気づけてくれます。特に公けに至聖なる聖体を崇敬する時に。

「めでたし、童貞(処女)マリヤより生まれ給いしまこと御体よ……(アヴェ・ヴェールム) 全教会の聖体の生命を母親らしく司どってくださるよう、幸いなる処女マリヤにお願いしましょう。生命と愛の霊の力において祝われ拝領されるキリストの御体と御血の秘跡を通して、全ての人々にキリストがお与えになるあの生命を受けることのできるよう、聖霊の花嫁である処女マリヤが聖霊に取り次いでくださいますように。

(六・一)

説教・講話・書簡等の抄訳

原罪と教会の教え

創世の書第三章に含まれた内容に従って、人間の歴史における最初の罪を分析し、罪の普遍性と遺伝性について啓示が教えることを他の機会に詳しく見ることができました。教会の教導職はこの真理を現在に至るまで繰り返し提示しています。本日は第二バテイクン公会議の文書、特に『現代世界憲章』と公会議後の『和解と悔悛』(八四年二月号に抄訳あり)を参照しましょう。

この教えの典拠は何よりもまず第一に創世の書です。私たちはそこで、人間が悪魔に誘惑されて「あなたがそれを食べれば、神のようになり、善と悪を知ることになる。」(創世3・5)、「自由を乱用し、神に対立するものとなり、自分の完成を神のほかに求めた」(現代13)ことを知ります。すると、「ふたりの目がひらけ」、「つまり、男と女の目がひらかれ」、「裸でいるのが分かった」(創世3・7)のです。その時、主なる神は、「男を呼んで『どこに居るのか』と仰せられた。『裸なので、こわくなってはさかしく思い、隠れました』と男は言った」(創世3・9-10)とても意味深長な答えです。人間は最初の義(原始義)の状態にあったとき、神の似姿に造られたもの、霊的肉体的存在として友情と信頼のうちに神と話すことが

できました。ところが今や、彼はこの友情と契約という土台を失ってしまいました。人間は、神の生命に与る恩寵、神への従属と神との父子関係という最初の聖なる(原始義)の状態に神に属することができなくなっていました。そして、男と女の存在と振舞のなかに罪の現存を感じるようになりました。自分たちの罪と、罪人としての恥ずべき状態を思い知らされ、神を恐れました。聖書のこの頁では、墮落後の人間の有様について、啓示の内容と心理分析が完全に一致しています。

罪の後に死が来た

新旧両約聖書からもう一つの真理が明らかになるのがわかるでしょう。すなわち人類史のなかに罪が(侵入)してきたということ。罪は人間の共通の運命、「母の胎」から引き継ぐ親譲りの遺産となりました。「母は罪のうちに私をみごもった」と詩篇作者はその生活に根差した苦しみの叫びを上げています。その苦しみのなかで、悔い改めが神の慈愛を求める祈りに結び付いています。一方パウロに目を向けると、彼はこの苦しみの経験にしばしば触れ、ローマ人への書簡の中で、「みな罪の下にある」と理論的に簡潔な表現をこの真理に与えています。

それはすべての口を開きし、全世界を神の裁きに服させるためである。』(ローマ3・19)「私たちもみな……本来は怒りの子であった。『エフェソ2・3』それらはみな、恩寵の助けなしに残された人間の本性、人祖の罪によって墮落した本性、したがって彼らのすべての子孫、後継ぎの状態を暗示していると、聖書学者たちは述べています。

受胎の瞬間に誰もが親から受ける罪の普遍性と遺伝性について、聖書が述べるところを読むと、原罪についてのカトリックの教えをもっと直接的に吟味するよう招かれていようように思えます。

最初の頃から教会の教えのなかでそれとなく伝達されてきた原罪についての真理は、四一八年の第十五回目のシノドス及び五二九年のオランジェのシノドスにおける教導職の宣言となりました。それは主としてペラジウス派の誤謬に対するものでした。Dz 222-223, 371-372参照)また、後の宗教改革の時代には、一五四六年のトリエント公会議によって(Dz 1510-1516参照)厳かに宣言され、信仰簡条になりました。トリエント公会議の原罪に関する教令はこの点を明確に表わしています。そこではこの真理が信仰の対象であり、教会の教えの対象となっています。したがって、それがカトリックの教えの本質である、ということから、次にこの教令に言及する必要があります。

人祖(教令では「最初のアダム」と言っています)は地上



の樂園で(したがって最初の義(原始義)と完全の状態において)、神の掟に背いて重大な罪を犯しました。人祖は犯した罪のために成聖の恩寵を失ったのです。同時に、始めから彼らの本質をなしていたとも言える聖性と義を失い、自らの上に神の怒りを招きました。

この罪の結果が死であったのです。創世の書にある主の御言葉を思い出すべきでしょう。

「善悪を知る木の実を食べてはならぬ。その実を食べたら、必ず死なねばならぬからである。」(2・17) 罪の後、サタンはその支配を人間にまで拡げることができました。トリエントの公会議「死の国の権力を持つ悪魔の勢力下に置かれることになった」(Dz 1511参照)と述べ、サタンの権力下にあることを(奴隷の状態)と言っています。

最初のドラマのこの面に立ち戻って、罪がもたらした「疎外」という要素を調べる必要があるでしょう。その際、注目すべきこと、それは、トリエントの教令が「アダムの罪」に言及して、人祖自身の個人的な罪(罪の源となったものとの罪 peccatum originis origians と称されるもの)であるとしながらも同時に、人類の歴史にもたらされたその恐ろしい結果(原罪の結果 peccatum originale originatum)についても明記している点です。

現代文明が強く異議を唱えるのは特にこの第二の意味の原罪に関することです。つまり人祖の決意とは関係があっても、私たち一人ひとりの決意と関係のない、遺伝的な罪という考えを受け入れることができません。このような考えは個人中心の人間観や人間の主体性を重んじる要求に反すると言いうのです。

けれども、原罪に関する教会の教えは現代人にとっても非常に大切なものです。この点に関する信仰の真理を拒絶した現代人は、日頃経験する悪の神秘的で悲観的な面が理解できず、理性に反する判罰的な楽天主義と希望皆無の徹底的な悲観主義との波にもて遊ばれることになってしまふのです。

不変の教え

摂理と創造の御業について

摂理シリーズ ②



1 創造によって神は無から全てのものを生じさせ、万物は神の外に存在しました。しかし、創造の御業はそこで終わったものではありません。無から生じたものは創造主によって存在を保たれないかぎり無に帰してしまいます。事実、宇宙を造られた神は、宇宙の存在を維持することにによって今も創造の御業を続けておられます。存在を保たせるとは創造し続けることなのです。

2 一般的な言い方をすれば、神の摂理とはなによりも「保つ」こと、無から生じた全てのものを支え維持することと解することができ、その意味で、摂理とはまことに豊かで多様な創造の御業を絶えず永続的に確認することであると云えましょう。創造された世界の内に創造主なる神が常に変わらず現存しておられるということなのです。それは創造を絶え間なく続け、存在する全てのものの根源にまで及び、被造物の存在と行動の第一因として働く現存なのです。この神の現存には、創造しかつ創造したもの全てを保とうという神の永遠の意志が不断に示されています。それは至高の意志であり、この意志によって、神のみ固有な善なる本性を通して、神は絶えず無に対して存在を、死に対して生を、「闇」に対して「光」を(ヨ

ハネ1・4・5参照) 良しと宣言しておられます。一言で言えば神の意志は、万物の真・善・美を愛で給うのです。摂理の秘義には創世の書に記された「これをながめて、よしと思われた」(創世1・25、31) 神の判断が途切れることなく不変に続いていくのです。これこそ、創造の御業を根本的にゆるぎなく肯定する判断なのです。

3 この肯定は、いかなる悪にも左右されることはありません。たとえそれが宇宙に属する全てのものに内在する限界から生じた悪であろうと、人間の歴史において起こったように、「神はこれをながめて……よしとして満足された」(創世1・25、31) に比して甚だ悲しい対象を持つて生まれた罪であろうとも同じことです。神の摂理は次の事実を認めよと勧めます。つまり、神の永遠の計画、その創造の意図の中には本来悪の入るべき余地はなかったが一度人間が悪を犯した後は神が悪の存在を許されたこと、ただし「神が全てをその善に役立たせたもつ」(ローマ8・28参照) との言葉通り、悪も結局は善に屈服するということなのです。

4 神の摂理に関する真理は啓示のどこにもみられることです。

創造の真理の場合と同じく啓示全体に充滿していると言えます。創造と共にこれこそ神が、「何度もいろいろな方法で」、「その昔預言者を通じて」「この終わりの日々には、その子を通じて」(ヘブライ1・1) 人々に伝えようとなされた事柄の中で第一の基本的な言及点となっています。そこでこの真理を啓示が直接語っている所と、聖書が間接的に証明している所の両方を本文に即して読み返す必要があります。

5 創造に関する真理は教会の教え(通常の教導職)の中で始めから考えられていました。ただし、創造についての真理として荘嚴な教義憲章『カトリック信仰』の中で宣言されたのは第一バチカン公会議の時です。それによれば「全て造られたものを神は摂理によってこの世の果てから果てまでその力を及ぼし、すべてを巧みに」(知恵の書8・1参照) 保ち治める。一つとして神の御前に隠れられるものはなく(ヘブライ4・13参照) 被造物が自由な意志で行うこともその例外ではない」(Dz 3003) のです。

6 公会議の文書は簡潔な表現で特有の必要性から記されたことは明らかです。公会議は何よりもまず摂理についての教会の変わらぬ教え、並びに聖書全体の使命につながる不変の教理伝承を確認することを望みました。キリスト教信仰の不変の教えを確認することで、当時の唯物論や理神論などの誤謬に対抗しようとしたのです。周知のように唯物論は神を否定し、理神論は神の存在と世

界の創造は認めるものの、造られた世界に神は全く関与しないと主張します。従って理神論は神の摂理に関する真理に直接攻撃を加えるものと断言して差し支えないでしょう。

7 理神論に見られるような創造の業と神の摂理との分離、唯物論固有の神そのものの否定は、唯神論の決定論への道を開き、今ではこの説が人類と人類の歴史を完全に席巻しています。理論的唯物主義が歴史的唯物主義に変わったのです。こうした状況の中で神の存在、とりわけ神の摂理についての真理は、宇宙における人間と人間の自由に対して根本的かつ決定的な保証となっています。すでに旧約聖書では、神は不滅の強力な支えであることを示しています。「主よ、力よ、私はあなたを愛する。私の岩、磐石、私の逃げ場。私の神、大岩、私はそこに身を避ける。私の盾、救いの角、私の城」(詩篇17(18)・3) 神は人間が全存在をかけてよりかかれる揺るぎない土台です。「私のなりゆきはあなたの御手にある」(詩篇15(16)・5)

神の側から見れば摂理は創造の御業全体と、特に被造物の中に占める人間の優位とに対する最高の肯定であり、この世における人間自身の主権を根本的に保証するものであると言えます。だからといって自然の法則が内在し決定的な働きをするということを否定するわけではなく、むしろ唯物主義的決定論を排斥するのです。唯物主義的決定論は、人間の全存在を(必然性の領域)におとしめ、事実上(自由の領域)を無きものにしてしましますが、自由こそは

創造主が人間に定められたことなのです。摂理によって神は(自由の領域)を守る究極の拠り所となっています。

8 神の摂理への信仰は、今なお人間という存在の基本的概念と、人生の意義とにしっかりと結び付いていることは明らかです。人間は盲目の運命に流されているのではなく、創造主であり父である御方に依存しているという確信があれば、人間は今までとは本質的にことなる方法で自らの存在に目を向けることができるでしょう。こうして使徒信經の冒頭に「我は信す全能の父」という言葉で記された神の摂理への信仰のおかげで、人間は諸々の運命論的考えから解放されるのです。

9 変わることはない伝統的な教会の教え、特に第一バチカン公会議の教えに倣い、第二バチカン公会議も度々神の摂理について語っています。神は「全てのものに父親のような配慮を示し」(「現代世界憲章」24) 特に「人類のことを」(「啓示憲章」3) 心に留め給うのです。神の配慮の現れは他にもあります。「永遠にして客観的、普遍的の神法を通して神は全世界と人類共同体の道を整え、指し示し、支配される」(「信教の自由に関する宣言」3) 「人が存在するのは、神が愛によって人を造り、愛によってその存在を保たせ給うからである。率直にその愛を認め、自らを造り主に委ねない限り、人は真理に一致して完全に生きることはできない」(「現代世界憲章」19)

『教皇様の声』ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説しながらそのままと伝える月刊紙 毎月 十日発行 定価 一部八十円 送料実費
 ■一年予約九〇〇円 送料六〇〇円 ■二十部以上の一括購入なら送料不要
 郵便振替 神戸 3-72393